

〈展望〉シカゴ便り

ヒグラシ, マサ / 日暮, 聖

(出版者 / Publisher)

法政大学国文学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

日本文学誌要

(巻 / Volume)

63

(開始ページ / Start Page)

118

(終了ページ / End Page)

122

(発行年 / Year)

2001-03-24

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00020158>

シカゴ便り

日暮 聖

日本文学科の皆さんお元気で過ごすごですか。

シカゴの暮らしにも少し慣れてきましたので、生活便りを書いてみました。

シカゴはワイルドな気候のところですよ。夏は日本と同じくらい蒸し暑さ、冬は零下三十度くらいまで下がるといふことです。風も強く、雷の名所でもあり、一晚中雷鳴や稲光がつづくこともあり、近くに落雷したりもしました。そのとき忘れていた子供の頃の記憶が、不意に蘇りました。私の実家は交差点の角にあるのですが、目の前で落雷し、火の玉が道路を駆けまわった光景が思い出されました。刻々と気候が変わります。買物に出たところどどん気温が下がり、身の危険を感じて引き返したこともあります。東京暮らしでは考えられないことです。とはいえ、台風になると外に出かけなくなる夕チなので、ワイルドな気候は日々の刺激になっています。こちらではお部屋をシェアして共同暮らしをしている人が多いのですが、人のたすけを必要とする状況から見ても当然のことのように思えます。

私の暮らしているところは、シカゴの南に位置するハイド・パークという緑の多い美しい住宅街です。シカゴ大学を中心に作られている街です。碁盤の目のように区画整理されていますので、迷子になる危険性は少なく助かるのですが、アパートの階段を登ると、東京を思い出して足が喜んでいのように感じるほど、起伏というものはありません。また、下町の路地裏という風景も見られないもの一つです。シカゴ大学で勉強する者にとっては理想的な環境で、もちろん悪所に類する場所はありません。バザールのような常設のにぎやかな場所もあります。そうならないように意図的に規制しているようですが、あまりの環境のよさに、学生の人気は他へ移りつつあるという意見も聞かれます。

食料品は、住民が皆、COOP(生協)を利用して整えています。物価はとても安いです。例えば、先日、トイレットパーパー・キッチンパーパー・紅茶・葱を買って3ドル50セントでした。ファックスコピー機能付き電話が一万円以下でした。服装は皆カジュアルな装いで、気楽に暮らせます。街なかでは車は時速二十キロ、横断歩道は歩行者優先で必ず止ってくれます。皆ゆつくりと暮らしています。

シカゴの人は親切です。ここで出会う労働者——ガスやさん・電話やさん・スーパーのレジ係・靴屋の店員さん——のほとんどが黒人です。特に黒人男性は陽気で有能で礼儀正しく親切です。買い物をしていると、これがグッドなんだと声をかけられたり、買い物籠を取ってくれたり、大荷物を抱えているのにドアを押えてくれたりと、日々感激の連続です。

意外なことに、日頃ご飯好きだったので、食べ物にもすぐ順応してしまいました。アメリカへ来て食べ物がおいしいといった人は初めてと言われたりもしました。まずパンが美味しい。東京のように白いふわふわしたパンは見かけませんが、小麦粉でしっかり作られたパンらしいパンがあります。そうはいつてもさすがに三ヶ月を過ぎる頃からしんどくなってきた、最近レバノン料理のお世話になっています。クスクスのようなお料理といえれば分かっていただけるでしょうか。葡萄の葉でライスを包んだもの、豆をすりつぶしたものなどどれも美味しいのですが、これも、オリブオイルが合わなくて、とうとう実家にお蕎麦とお煎餅を送ってくれるよう頼んでしまいました。

着いてからすぐに原稿を書き始めました。砂漠で水を飲むように飢餓感を満たしているという感じで、幸福感も味わいました。他方生活の方は、電話の設定に四十日かかり、ガスは出ない、シャワーはほとんど使えない、eメールの設定は出来ないという混乱状態でした。恐る恐る初めて電子レンジでお湯を沸かしました。さらにクレジットカードが使えなくなり、歯を抜きに行つて麻酔をしたら、担当医の自宅のベビーシッターから、赤ちゃんがどこから落ちたらしく泣き止まないという連絡が入るなど、ハプニング続きで両極端の経験で揉まれている感じでした。集中して原稿を書くことには二ヶ月で行き詰まってしまう、ここ何ヶ月かは、読書の傍ら、ニューヨークへ旅行したり、ダウンタウンへ行つたり散漫な日を送っています。

ニューヨークは、やはり高層ビルが目立ちます。けれど空が高く開放感があります。出掛けた時期が7月4日の独立記念日と重なってしまい、全国からおのぼりさんが(私もその一人ですが)やってきて、海兵隊も町にあふれていて、クリントンが来て交通規制があるなど、観光地の人だかりを歩いているようで疲れました。セントラルパークとメトロポリタン美術館は楽しかったです。それにここ数年ニューヨークはとても安全な都市になっています。なんと

いっても女性が颯爽と歩いているのが目に付きます。体を鍛えていて、機敏で力がありそうで、頼もしい限りです。しかし、アメリカの喫煙率は現在一割程度ということですが、昼休みに、ビルから通りに出て喫煙しているのは、ほとんどがワーキングウーマンでした。

暮らしているハイドパークから繁華街のダウンタウンへは、ノンストップの直通バスで十五分ほどで行けます。便利ですが、隣接する犯罪多発地区といわれる場所を停まらずに通過し、その住民を乗せないということでもありません。先日はシカゴ美術館へ行ってきました。ルノアールがたくさんあります。幾つかの美術館を見て思うのですが、上野の森の博物館・美術館の展示を見てきている私たち東京人の蓄積はかなりのものではないでしょうか。また、ダウンタウンは都市の生成という視点から見ても面白いところがあります。映画でお馴染みのシカゴの高架鉄道の走っている地区をループといいます。このループ地区がこれまで繁栄の中心だったのですが、最近はそのモールに移っているというので、町の通りを歩いて観察してきました。日本でも郊外にはモールを真似たものが作られているのではないのでしょうか。その中に入ってしまうえば内部の空間ですべての用事を足せるというような場所が。

ハイド・パークから車で二十分ぐらいの所に、フランク・ロイド・ライトの建てた家二十数件が集散的に集まっているオーク・パークがあります。ロイドの建築がこれだけ残っているのはアメリカでも珍しいそうです。窓ガラスのデザインがとても美しいのです。ここはヘミングウェイの故郷でもありました。

さて、出歩くばかりでなく室内に戻ることにして、読書では、ずいぶん以前に書かれたものなのですが、アウエルバッハの『ミメーシス』やE・バンヴェニストの『一般言語学の諸問題』、マルク・ブロックの『王の奇跡』やゴンブリッチの『棒馬考』などどれもとても楽しい読書でした。第二次世界大戦を四五十年代で過ごしている人たち、また亡命経験をしている人たちはいい仕事をしていますね。

ここで少し、私がビジティング・スカラーとして所属しているEast Asian Language and Civilizations (東アジア言語文化学部)の大学院生の勉学の様子についてお話しします。この学部は日本風といえば、中国文学科・韓国朝鮮文学科・日本文学科と歴史学科が合わさっているような学部です。入試については省きます。いざ入学しますと、最初の二年間に十八科目を取得し、原書を読んで書いた論文を二つ提出することが義務付けられています。日本文学専攻ならば、翻訳されていない作品つまり日本語で読むということですが。

一年は四学期に分かれています。一学期は十週間。普通夏学期は休みにすることが多いので、夏休みは四ヶ月近くあ

ることになります。これで計算しますと、一年に九科目、一学期に三科目受講する勘定になります。

先ほども触れましたように、East Asian Languages and Civilizationsの中に日本文学研究は属していませんから、日本文学専攻の者は、英語・日本語以外に、韓国語・現代中国語・古典中国語のなかから言語を一つ習得しなければなりません。言語の授業は、二年間毎日、三年目は隔日に授業があるため、これにかなりの労力を割くことが求められます。あまり大変なため、例えば、中国文学専攻の学生から、なぜ日本語をやらねばならないのかと不満の声もあがるのですが、中国文学の、特に古典研究には日本語の文献を読むことが不可欠と教授側から返答されているということです。

一学期十週間の授業内容は、毎週取り上げる書物から読むべき参考文献、提出論文の課題等にいたるまですべて開始時に指定されており、学期が始まるとその進行していくペースは非常に早い。だいたい一回に一冊の本を参考文献を含めて読まねばならないということなので、かなりの量の書物を読むことになります。マイナス面をいえば、立ち止まって考えているひまがなく、五週目くらいからは提出するレポートの絞り込みに入るので後半の課題をじっくり読まなくなる傾向にあるということです。多分今後は、ゆっくり読む能力を身に付ける必要が出てくるのではないのでしょうか。授業では自分の意見を発表することは当然求められ、発言しないものは能力がないとみなされるという事情は、もう皆さんの御存知のとおりです。映画の講座をとったところ受講生は三人で、毎週三〇分の意見発表を求められて準備が大変という話も聞きました。余談ですが日本映画の研究者の需要は高いようです。

大学院に入ってから二年間は、食事と入浴のときだけがほっとできる時間というように、文字どおり勉強づけの日々を過ごすことになります。ダウンタウンに出かけるようなゆとりもなく、男だったら髭ぼうぼうになったのではないかという声も聞かれました。

二年間で単位を取得しますと、三人のアドバイザーを決めます。内一人をチエアドバイザーにしますが、これが日本でいう大学院の指導教員に近い存在です。選んだ三人の教授の専攻にしたがって、それぞれテーマを決め、リーディングリストを作成します。たとえば、川端康成研究でPhD（博士号）をとろうとしているある院生が決めたテーマは次の三つです。

- ① 女性と文学——美学と政治
- ② 日本のモダニズム——1930年代
- ③ テキストの解釈——プラハ構造主義と日本文学

一つのテーマにつき二十〜三十冊の読むべき本を教授と相談しながら決め、それぞれ、2ページの問題点を記したペーパーを提出して、面接試験を受けます。三人の教授を相手に二時間の面接。さらに語学テスト（日本語を英文に直す）を受けます。この面接と語学テストが終了すると一つの関門を越えたこととなりますが、だいたい単位取得後一、二年かけて行います。

次にプロポーザル（博士論文計画書）を作成します。三十ページ程のプロポーザルを学部の人たちに配り、ディフェンス（公開質問会）の日時をメールで知らせます。こうして三人のアドバイザーの立会いのもと、任意に出席した仲間からの質問を受け、ディフェンスが終了して初めて、PhD取得のための資格が得られたこととなります。ここにたどり着くまでに院生の淘汰も行われるようです。

次に博士号のための論文を二、三年かけて書きます。論文を提出し、面接を受けて終了です。

博士号論文を書き上げるまで、大学院入学からおよそ十年というのが目安のようです。入学後二年間で単位を取得してしまえば、後は原則的には授業に出る必要はなく、個人の孤独な作業ということになります。この点日本の場合にはかなり手取り足取していただきますから違うのではないのでしょうか。およそ十年の在籍中に、日本語の学習のために一年間（単位取得後くらいに）の日本留学を、また論文作成のための一年間の日本留学を、さまざまな奨学金制度や提携校との交流を通じて行います。アメリカ社会は入試から就職まで推薦文が重きをなす社会でもあり、教授を中心にした激しい競争にさらされているというのが実感のようです。

職を得るためにはティーチングの有無が問われるため、院生が大学生に語学を教える制度がシカゴ大学では積極的に設けられているようです。こうしていよいよ職探しの段階に入るわけですが、シカゴ大学の大学院生の様子は大体以上のようなようです。興味を持っていただけたでしょうか。それでは、お元気で。

八月某日

（ひぐらし まさ・文学教授）